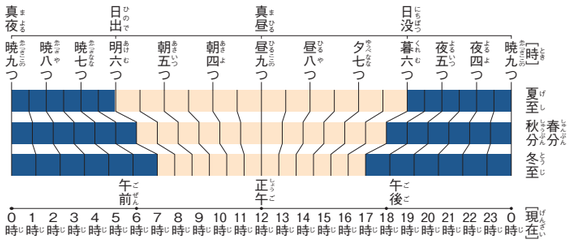
人々の暮らし②

江戸時代の人たちは、規則正しい生活をし、
季節ごとの行事を楽しんでいた。
江戸の中ごろを過ぎると、楽しみの種類が増えた。



季節による時刻の変化
江戸時代には、日の出の「明六つ」と日没の「暮六つ」が時刻の基準だった。そして、その間の昼と夜をそれぞれ6等分し、「一刻」と決めていたため、季節によって昼と夜の一刻の長さがちがっていた。

<太陽に従った生活>

江戸時代には、人々は日の出と共に起き、日没と共にねた。当時の照明は、高価な菜種油をつかっていたので、とくに裏長屋の人々は、夜ふかしをしなかった。

「時の鐘」と1日の生活

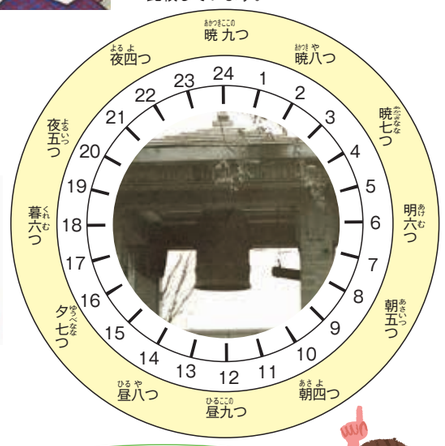
人々は、2時間ごとに鳴る「時の鐘」の音で、おおよその時刻を知った。「時の鐘」は、石町(のちの本石町、現・日本橋本石町)にはじめてでき(→p.153)、江戸の町が大きくなるにつれ、数が増えた。

●納豆売り
裏長屋の1日は、納豆売りや豆腐売りの売り声ではじまる。

●ねる(日没〜)
裏長屋では、家族全員が同じ部屋でねる。いい夢見てね。

●起床(日の出〜)
柳の枝の先をつぶしたもので歯をみがき、顔を洗って朝食。

時間を知らせる「時の鐘」(下の円内)
※現在の時刻は春分と秋分の日で比較しています。



●夕食(17時ころ〜)
夕食は、ごはん、みそしる、煮物などのおかず1品と漬け物の、一菜一汁が多かった。当時は、1人ずつ足のついた膳(食事を置く台)で食べた。

●仕事開始(8時ころ〜)
朝食のあとは、仕事に出かけたり、あとかたづけや上水井戸(→p.20)で洗たくをしたり。子どもは寺子屋へ。

●夕食の前後には湯屋(銭湯)へ(16時ころ〜)
当時は、各家に風呂はなく、湯屋に行った。水は貴重だったので(→p.20)、風呂は蒸し風呂だった。男風呂の2階は、将棋を指したり、おしゃべりをしたりしてくつろげた。

●勉強のあとは遊ぶ(13時ころ〜)
寺子屋が終わると、家で昼食を食べて、遊ぶ。ちなみに、「おやつ」は昼八つころ(14時ころ)に食べるから、「お八つ」というようになった。

江戸時代のはじめのころは、鐘ではなく、江戸城内で太鼓をたたいて時刻を知らせていた。

季節ごとの楽しみ

新年のお祝いから年末の大みそかまで、花見や祭りなど、人々は四季折々に、いろいろな行事を楽しんだ。

春

正月7日のようすをえがいた≪五節句之内睦月≫

6月に行われる日本橋魚河岸旧天王祭。

夏

江戸で最もにぎやかな浅草の酉の市。

冬

佃島盆おどりは7月に行われる。

秋

寄席、見世物、旅行も大人気!!

寄席は、気軽に安く楽しめるものだった(→p.65)。また、明暦の大火後にかけられた両国橋(→p.33)の西側(両国広小路)は、屋台や大道芸、見世物などの芸人が集まり、にぎやかだった。お金持ちの人々の間では、旅行がブームになった。

西両国で人々を楽しませた曲芸
両国や浅草、上野では、サーカスのような曲芸、めずらしい動物や手品を見せる見世物小屋が建ち並んでいた。調子のいい売り文句で気を引いて、商品を買わせる物売りもいた。

人気があった「江ノ島詣」
お金を積み立てて、富士山や伊勢などへお参りに行く旅行がはやった。江戸から近い江ノ島には、多くの人が訪れた。

江戸時代には、1〜3月を春、4〜6月を夏、7〜9月を秋、10〜12月を冬と考えていた。